

現代外國為替論

徳永正一郎著

現代外国為替論

徳永正二郎 著



有斐閣
経済学叢書

● 著者紹介

とく なが しょう じ ちろう
徳 永 正 二 郎

1940年山口県に生まれる。

1965年山口大学経済学部卒業。1970年九州大学大学院経済学研究科退学。西南学院大学商学部講師，同助教授を経て，

現在 九州大学経済学部助教授。

専攻 世界経済論

著書 『為替と信用——国際決済制度の史的展開』新評論，1976年；『南北問題を見る眼』（共著）有斐閣，1980年；『国際貿易論』（共著）有斐閣，1981年，ほか。

現代外国為替論

〈有斐閣経済学叢書〉

1982年12月15日 初版第1刷印刷

1982年12月25日 初版第1刷発行

定価 3,500 円

著者 徳永正二郎



発行者 江草忠允

発行所 株式会社 有斐閣

〒101 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 (03) 264-1311 振替 東京 6-370
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 株式会社精興社 製本 株式会社高陽堂

© 1982, 徳永正二郎. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-06390-7

はしがき

世界経済が変動相場の世界に引き込まれたことによって外国為替論の領域と分析対象は深化・拡大し、多様化してきている。その対象領域は、個別企業・銀行の対外決済、外貨資金の調達と運用、さらには為替投機といったミクロの世界から、過剰流動性問題、変動相場問題という諸国民経済、世界経済の動向をも左右するマクロの世界にまで及んでいる。

従来の外国為替論は、ともすれば実務論的にしかも為替銀行に視座をすえて分析されてきた。外国為替を論ずることは為替実務を論ずることだという風潮が一般的でさえあった*。ところが、1960年代の国際通貨危機を経て、70年代に変動相場の世界が現われるや、外国為替問題は、国際収支問題、過剰国際流動性問題、世界インフレ問題等々の姿をとり、マクロ経済学的な研究対象としての性格が露になった。いわゆるマネタリー・アプローチの台頭はそのことを如実に物語っている。

* もっとも、ゴッシェン、〔59〕は、120年前に国民経済的視点から外国為替論を展開していた。

本書は外国為替論のもつこれら二つの側面に注目しつつ、その総体的分析を心がけている。その場合、理論的分析の核となっているのは、外国為替論は国際収支という二国間の受払いのメカニズムをベースにして展開されるべきであり、またそれにもとづいて深化・発展してきているという発想である。つまり、外国為替システムは国民経済と国民経済、あるいはある特定の中心国（基軸通貨国）を巡る諸国民経済間の決済メカニズムとして基本的に受け止められている。

本書では、第1章から第5章にかけてこのような外国為替理論の構築を目ざしている。とはいえ、国際決済システムという有機的メカニズムは、歴史的に進化・発展してきたと考える筆者は、一方でこの理論構築を発生的に展開すべく努めた。この試みはとくに旧著『為替と信用——国際決済制度の史的展開——』（新評論、1976年）に顕著にみられたが、ここではそれを土台に、ドル本位制の形成に焦点をあてて整理し直し、理論的展開を試みた。

その際、実務的操作をふまえて理論の展開を図るばかりか、ドル本位制下で

出現した変動相場の世界の諸現象を分析するための基礎理論の構築に意を注いだ。そのこともあって、とくに第1章、第2章および第5章は小むずかしく思弁的にさえ映るかもしれない。しかし、それらはすべて實際をにらんだ論理展開である。したがって、上記三章にみられる論理的思弁性も、具体的に叙述されている諸章を読み進むにつれて次第に解消され、筆者の意図も併せ理解していただけるものと信ずる。

ところで、いま私は、ドル本位制、変動相場の世界を表象しつつ、外国為替の理論的分析を行なったと述べた。このことは、本書の関心が、たんなる外国為替の理論の展開ではなく、ドル本位制のもとで混迷を深めつつ機能している変動相場の世界をできるだけ生き生きと描き出すという筆者の意図を別の形で表わしたにすぎない。

貨幣的諸現象によって混迷の度をいっそう露にし、矛盾を深めている現代世界経済を分析すること、とりわけ現代世界経済をマネタリーな側面から外国為替問題として解剖するのが、本書の目的である。この作業は、国際通貨制度の制度的変遷（いわゆる IMF・GATT 体制の崩壊の事実）を説いたからといって、あるいは国際資産選択として過剰流動性の国際的回流現象そのものを叙述することによって、果たされるものではない。現象の背後にあるより内的なものを解明・抽出することによって、それら諸現象のもつ意味・内容をより適切に説明することができる。

序章で述べているように、変動相場の世界を解剖するために、①固定相場制から変動相場制への移行問題、②ドル本位制と過剰流動性問題*、③本来の為替取引から完全に遊離した構造的為替投機、すなわち過剰流動性を「退蔵」する特殊歴史的形態としての浮浪（volatile な）貨幣資本移動の分析という三課題を設定している。これらは、主として第6章～第8章で分析されるが、第1章から第5章はそのための理論的礎石である。

- * もともと本書は、②の課題を分析するために「ドル体制と為替制度の変化——為替制度と米国経済」という一章を第6章と第7章との間にもっていた。そこでは、固定相場制下でユーロダラー市場の果たした歴史的役割と、変動相場の限界（70年代末から80年代初め）ならびにそのもとでの米国の国内・対外両面における金融・経済構造の変化、過剰流動性滞留下の金融イノベーション、高金利問題等について取り扱っていた。しかし、紙幅の都合上、同章は、国際収支と国際流動性問題に関

する論争を整理した別の一章とともに割愛した。

近代経済学における外国為替論のマクロ的展開は、いわゆるマネタリー・アプローチとしてモデル構築に力点をおき、政策提言のための理論装置づくりという性向を強くもっている。だが、本書では、ドル本位制をベースとした変動相場の世界が出現する根拠を理論的に明らかにし、長期不況の世界で過剰流動性の国際的貯水池たるユーロ市場と諸国為替市場とが急激に成長するという特異な現象の背後にあるものを為替現象との関連で探り出すことを課題としている。

構造的病弊に処方箋を発行するのが臨床医だとすれば、私は構造的病弊そのものを解明する基礎医学の一隅に居住する一介の分析学徒たるにすぎない。本書は生来そのようなものとして性格づけられている。

なお、本書を脱稿してのち、恩師木下悦二先生の学恩の大きさに思いを新たにしている。また、深町郁彌先生をはじめ、高須賀義博・高山満両先生を中心とする独占研究会の諸先生、佐藤定幸先生を中心とする日米経済研究会の諸先生方から多くのご教示をいただいた。この場を借りて感謝の意を表わしたい。

本書をこのような形で上梓できたのは有斐閣編集部の涌井義治氏の御陰である。氏をはじめスタッフの方々には編集・校正の途上でいろいろとご迷惑をおかけした。お詫びとともども心からお礼を申し述べたい。

最後に、引用文献の作成など家族の力添えもあって本書が日の目をみたことを付記しておきたい。

1982年10月15日

徳永正二郎

目 次

序 章 現代の外国為替問題	1
はじめに——本書の課題	1
1 変動相場制への移行の論理——市場問題としての基本的性格と国際価値論的アプローチ	3
2 「金廃貨」の論理と過剰国際流動性——ドル本位制と変動相場	5
2.1 金節約のメカニズムとドル本位制	5
2.2 ドル本位制下の過剰流動性問題と変動相場制	8
3 国際的資産選択（浮浪資本移動）と相場変動メカニズム	
——いわゆる過剰国際流動性について——	11
3.1 ドル本位制下のドル——「弱くて強い」理由	11
3.2 相場変動メカニズムと貨幣市場の国際的統合	14
3.3 過剰国際流動性ドルの吸収・隔離メカニズム——70年代後半と80年代初めの異質な国際短資移動	15
第1章 貨幣価値の国民的相違と為替平価	19
1 国民経済と世界市場	19
2 国際価値と貨幣価値の国民的相違	25
2.1 国際経済関係とマルクスの分析視座	25
2.2 国民的労働の関係と剰余価値率の格差——絶対的剰余価値生産への付加効果	30
2.3 貨幣価値の国民的相違と剰余価値率——相対的剰余価値生産への付加効果	34
2.4 外国貿易と資本蓄積誘因	37
3 貨幣価値の国民的相違と為替平価	40
3.1 国民的生産力格差にもとづく貨幣価値の国民的相違といわゆる貨幣減価——両者の区別	40
3.2 「真実の為替平価」と金平価	44
3.3 金平価と国際収支調整	58

第 2 章 外国為替と国際収支調整…………… 69

- 1 為替決済システムと世界貨幣金——重層的な世界貨幣節約のメカニズム…………… 69
 - 1.1 旧式信用状と為替手形…………… 69
 - 1.2 為替取引にもとづく国際決済と金節約——金節約の本来的メカニズム…………… 78
 - 1.3 対外支払準備概念の発展といわゆる「金廃貨」——対外支払準備金の節約と対外支払準備概念…………… 86
- 2 当面の国際収支調整とインターバンク外国為替市場…………… 95
 - 2.1 国際収支とその部分集合——外国為替収支および邦貨建収支との一般的相関性…………… 95
 - 2.2 国際収支調整と外国為替収支調整メカニズム…………… 102

第 3 章 取引通貨と為替媒介通貨——国際通貨としての英ポンド——113

- 1 取引通貨の多様性とドル引受信用…………… 113
 - 1.1 問題の所在——基軸と分極…………… 113
 - 1.2 取引通貨の多様性とドル引受信用…………… 118
- 2 取引通貨の多様性と国際通貨ポンド…………… 124
 - 2.1 ポンド体制下の諸国の取引通貨…………… 124
 - 2.2 国際通貨英ポンドとその機能——歴史的検証…………… 129
- 3 国際通貨機能と裁定取引…………… 138
 - 3.1 為替市場媒介通貨 (vehicle currency) ととしての英ポンド…………… 138
 - 3.2 諸国の為替持高・資金調整とロンドン貨幣市場…………… 141
 - 3.3 裁定取引と国際通貨…………… 145
- 4 インターバンク・カレンシーとしての英ポンド——準備資産 (準備通貨) の価値安定性と金の役割——…………… 149
 - 4.1 ペーパー・カレンシー下の為替メカニズム——ロンドン・パランスの役割…………… 149
 - 4.2 「準備通貨」の分散化現象と金為替本位制…………… 151
 - 4.3 結びにかえて——二つのインターバンク取引の区別…………… 152

第4章 国際通貨とドル本位制——国際通貨協力体制と

過剰流動性	157
1 金為替本位制と国際信用システム	157
1.1 金本位制と国内信用貨幣制度	157
1.2 金為替本位制と国際信用貨幣制度	161
2 国際通貨とキー・カレンシー・システム——ドル本位制の 分析——	168
2.1 国際通貨と国際流動性	168
2.2 金為替本位制と管理通貨制	176
2.3 管理通貨制と「国際金決済制度」(三国通貨協定)	178
2.4 国家独占資本主義下の国際決済機構とキー・カレンシー・シ ステム——ドル本位制: 管理通貨制支持の国際協力体制	180
3 ドル本位制下の過剰流動性問題	185
3.1 戦後過剰流動性問題の二側面——対外支払準備の過剰と現実資本 にたいする遊休貨幣資本の異常な堆積	185
3.2 過剰生産恐慌下のインフレーションと貨幣恐慌の回避	187
4 有効需要創出と過剰国際流動性——国際通貨協力の歴史的役割——	193
4.1 管理通貨制下の有効需要創出策と国際通貨協力体制	193
4.2 過剰国際流動性の存在形態と外国為替市場の変容	196

第5章 外国為替相場と相場変動——為替市場と国際貨幣市場と

の相関性の分析	201
1 直物為替相場——為替持高・資金調整のメカニズムと 国際貨幣市場——	201
1.1 為替相場概念——川合一郎氏の為替相場＝為替利子説にたいする諸 批判と関連して	201
1.2 直物為替相場と為替持高調整——二国モデル	204
1.3 為替資金調整と為替利子概念——二国モデル	212
1.4 国際通貨による為替持高・資金調整と国際貨幣市場——国際的 信用貨幣の創出と国際的信用決済メカニズム	220

2	先物為替相場概念と先物為替投機＝相場変動論	225
2.1	先物為替相場と調整的短資移動——先物為替利子と金利裁定取引	225
2.2	先物為替投機と相場変動論——ジャセイニスプラオス VS ツィアン グ論争との関連で	230
3	為替投機と国際短資移動——相場変動の原因とそのメカニズム——	234
3.1	変動相場下の相場変動と合理的期待仮説	234
3.2	相場変動へのヘッジと為替投機	237
3.3	相場変動の一般的原因とそのメカニズム——現実経済沈滞下の 遊休貨幣資本の成長との関連で	247

第 6 章 国民経済の不均等発展と為替制度の転換——変動相場 制移行の論理

1	不均等発展の逆転化と国民経済間の対抗性——国際価値論的ア プローチ——	259
1.1	貨幣価値の国民的相違の形成メカニズムと管理通貨制	259
1.2	成長停滞国における蓄積条件の悪化とフィスカル・ポリシー	262
1.3	貨幣価値の国民的相違が生ずる二契機と資本蓄積・実現条件 の質的相違	266
2	全般的過剰生産局面と変動相場制——経済法則の作用と人為的 反作用——	270
2.1	米国経済と西独・日本経済間の不均等発展の逆転化：1960 年代	270
2.2	米国のインフレ誘因的フィスカル・ポリシーと西独・日本経 済：1960 年代後半	272
2.3	米国経済における二重の国際競争力低下：変動相場制による 国際競争力確保志向	274

第 7 章 過剰流動性と国際資本移動——74・75 年リセッションと 国際短資移動

1	社会的遊休貨幣資本（過剰流動性）とユーロ市場——1974・75 年リセッション後の過剰国際流動性——	281
1.1	全般的過剰生産とインフレーションの時期区分	281

1.2	ユーロ市場と長・短期資本取引	285
1.3	外貨準備の堆積と資本輸出の形態	289
2	過剰ドル問題と国際短資移動——30・40年代の経験と70年代の 新局面——	293
2.1	過剰流動性の二つの現象形態——絶対的流動性選好と持続的 インフレ	293
2.2	過剰国際流動性と国際短資移動——74・75年リセッション後 の相反する二局面	303
2.3	国際短資移動と二つの過剰ドル吸収・隔離メカニズム——国 際的資産選択と世界インフレ	311
 第8章 構造的為替投機とユーロ市場——ユーロカレンシー市場		
	の多様化・統合化と国際的資産選択	317
1	ユーロカレンシー市場の新しい性格——「出島」型市場——	317
2	国際的資産選択と為替投機——ユーロカレンシー市場の多様化現 象——	322
2.1	投資通貨としての独マルク——西独における浮浪的 (volatile な) 投資の著増 (1976~79年)	322
2.2	ユーロ市場と為替市場との有機的結合——浮浪的投資と関連して	327
2.3	ユーロ市場の多様化	332
3	構造的為替投機と国際通貨ドルの役割	333
3.1	CHIPS システムとインターバンク・ドル決済	333
3.2	コルレス業務の変質と外国為替市場の成長	337
3.3	構造的為替投機とドルの役割——ドルを基軸とするユーロカレン シー市場の統合性	341
4	構造的為替投機の世界——過剰流動性の温存形態——	344
4.1	為替投機構造の進展——80年代初め	344
4.2	過剰流動性の温存メカニズムとしての構造的為替投機	351
	引用参考文献	355
	索引	380

序 章 現代の外国為替問題

はじめに——本書の課題

本書の基本的モチーフは、今日の変動相場の世界を外国為替現象を媒介にして分析し、その内実を露にすることにある。つまり、変動相場の世界として表象される現代資本主義の世界的体制を外国為替問題として解剖することが、ここでの課題である。

ところで、変動相場の世界は、1968年の金二重価格制以降、すなわち米国のいわゆるビン・ネグレクト政策（国際収支節度の放棄）のもとで急成長したユーロドル市場を基盤として、71年8月、米国のスタグフレーション対策として打ちだされたニクソン新経済政策とともに実質的には具現した。金とドルとの全面的兌換停止措置のもとで、ドルは忌わしい金属貨幣金の頸木から名実ともに解放された。それとともにドルの主要国通貨にたいする全面的切下げの世界が開かれた。これは、同年12月のスミソニアン合意によって小康をえたとはいえ、73年春の全面フロートの前哨であった。74・75年の世界的リセッション（全般的過剰生産の顕現化）以降、変動相場の世界は、現実経済の沈滞下で貨幣資本の一方的拡大とインフレ現象を伴ったその独自の運動の場として存在している。マネタリーな世界が、世界市場の相対的縮小のもとで、歴史の表舞台に現われ、外国為替問題が現代資本主義の影武者として私たちの分析の眼を幻惑させている。

現代外国為替問題の分析は、マネタリーな側面から現代世界経済を解剖する

作業の一つである。しかしその作業は、現実経済を分析の彼方へ追いやったマネタリーな現象の単純な把握を意味するものではない。貨幣経済的事象は現実経済の反映であり、メダルの裏面である。貨幣経済的事象はそれ自体貨幣資本の独自の運動を表現するとはいえ、現実経済と連繋し、相互に作用と反作用を及ぼしあっている。それゆえ、外国為替問題として今日の変動相場の世界を分析するに際しても、① 今日の変動相場の世界におけるマネタリーな現象と現実経済との一般的相関性の分析、② 変動相場の世界で現実経済から相対的に自立して貨幣資本の独立的運動が発生する根拠の分析、および③ 変動相場の世界で展開される貨幣経済的事象の分析とそのメカニズムの解明、等が一般的分析課題として設定されなければならない。

本書では、上記の分析課題そのものを具体的に定めるために、変動相場の世界を分析する出発点として、つぎの三つの事象に着目している。

- (1) 変動相場の世界は、60年代の高度成長のあと、69～71年の米国経済のスタグフレーション化、74・75年の世界的過剰生産の顕現という世界市場における過剰生産局面で出現し、一種の世界市場再分割問題としての性格をもっていた。
- (2) ドルの主要国通貨にたいする全面的フロート化は、金ブール制(62年)、金二重価格制(68年)を経て71年8月のドル本位制——すなわち金・ドル交換性の停止のための、したがって米国を含む諸国の管理通貨制を支える国際通貨協力体制——の確立とその体制下で生じたユーロカレンシー市場への過剰流動性(過剰ドル)の堆積現象と呼応して現われた。
- (3) 主要国通貨間の全面的フロートの世界は、諸国の現実経済の沈滞化とは重腹に、ユーロカレンシー市場およびインターバンク外国為替市場の一方的急成長という特異な現象を伴っている。つまり、変動相場の世界では、浮浪(volatile)な貨幣資本のグローバルな回流運動が、過剰流動性すなわち社会的遊休貨幣資本滞留の場としてのユーロカレンシー市場をベース・キャンプに、切上がり予想通貨建貨幣資産への乗り替え運動として、外国為替市場を媒介に極めて能動的に展開されている¹⁾。

それゆえ、本書は具体的分析課題としてつぎの三つのテーマをもっている。

- (1) IMF体制成立時に基本的に志向され、60年代の高度成長期にも維持されてきた固定相場制が、なぜ資本主義世界市場の過剰生産的局面で否定されたのか。その理

1) この点について本山美彦氏([364])も注目し、適切に指摘をしている。ただし、氏の関心は、過剰流動性の受け皿としての途上国の債務累積問題に傾き、ユーロカレンシー市場と外国為替市場の急成長の背後に現代国際短資移動固有の問題があることにはふれられてはいない。本書では、第5章、第7・8章に多くの頁数をさいているように、過剰国際流動性の運動メカニズムと滞留形態を分析課題としている。

論的説明根拠をどこに求めるべきか（第1章，第6章）。

- (2) 諸国，とりわけ米国の管理通貨制を支える国際通貨協力体制がいわゆる「金廃貨」の体制，同じことだがドル本位制として出現した根拠はどこにあるか。また，それがどうしてユーロ市場という国民経済から相対的に自立した特殊歴史的な国際貨幣市場の形成と結びついたか。さらにまた，このような体制のもとで米国の経済はどのように対応したか，あるいはしているか（第2～4章）。
- (3) 変動相場の世界で貨幣資本の独自の運動が，諸国の外国為替市場と国際貨幣市場との融合ないし統合現象として，しかも浮浪（volatileな）国際資本移動，すなわち国際的資産選択運動として存在しているとすれば，それはどのようなメカニズムとして存在し，沈滞化した現代世界経済のなかでどのような歴史的役割を果たしているのか（第5章，第7・8章）。

1 変動相場制への移行の論理

——市場問題としての基本的性格と国際価値論的アプローチ——

60年代の国際通貨問題が米国と主要国との不均等発展の逆転化²⁾と相関性をもつという分析は，瀬尾芙美子，木下悦二両氏によってなされた³⁾。また，木下悦二氏は，経済成長の不均等発展のもとで生ずる国民的生産性格差の形成に対応して，貨幣価値の国民的相違が存在することを明示した⁴⁾。これは，リカード，マルクスのみならずケインズによっても関心をもたれた現象でもある。マルクスは，資本主義の発展程度が異なり，したがって国民的生産力水準の格差形成を意味する資本の有機的構成が異なる二国間で，より生産性が高い国民経済の側の，実際に商品生産に要したその国の社会的必要労働時間以上により多くの労働時間が投下されたかの如き絶対的剰余価値生産効果および国民的労働の生産力水準の発展以下に実質賃金を抑え込む相対的剰余価値生産効果が，関係する二国の国民的生産力水準の格差を映す貨幣価値の国民的相違という現象を介して生みだされることを説いた⁵⁾。また，ケインズは『貨幣論』（I，第21

2) 本書では，格差が一方的に拡大していくプロセスを不均等発展とよび，その格差が縮小するプロセスを不均等発展の逆転化とよんでいる。

3) 瀬尾芙美子，〔209〕；木下悦二，〔197〕。

4) 木下悦二，〔196〕，144-51ページ；木下悦二，〔199〕，第3章。

5) これは，周知の国際価値論の枠組にある経済学的範疇である。国際価値論は，従来国際貿易，

章「国際不均衡による変化」)で、第二次大戦前の英米間におけるように国民経済間に不均等発展の逆転化が生じたとき、成熟した経済大国(英国)の側で貨幣価値の相対的切上げが生じ、蓄積条件が悪化することを指摘した。

これらの理論的提起は、60年代における米国のフィスカル・ポリシーに依存した経済と西独・日本などの経済との間の不均等発展の逆転現象と、そこで生じた世界市場再分割問題を説明する理論的素材として、本書では積極的に受けとめられている。すなわち、第1章では、国際価値したがって貨幣価値の国民的相違と資本蓄積の一般的相関性が分析され、第6章では、不均等発展の逆転化のもとで、今日的な世界市場再分割抗争が、変動相場による国際競争力の殺ぎ落としと新保護主義(米国による自国市場の保護と主要国への開市場の要求)の体制下で展開される根拠について分析をしている。その場合、とくに過剰生産的局面で発生した限られたパイ——世界市場——を巡る抗争が、変動相場への移行を現実化する契機であったことに注目している。

固定相場制から変動相場制への移行は、秩序から無秩序への移行あるいは国際通貨制度ないしドル体制の崩壊として単純に論じられがちである。第6章では、この移行の論理を国際価値論をベースに、現代世界市場再分割戦の一環として分析し、変動相場制が基本的には、世界市場における経済成熟国米国と内的成長因を保有した西独・日本などバイタリティをもった資本主義国との間の不均等発展の逆転化という資本蓄積運動の一帰結であることを明らかにする。

また、第1章3でみるように、二国民経済間の不均等発展あるいはその逆転化の結果、国民的生産力水準の変化を映すものとして生ずる貨幣価値の国民的相違(これはいわゆるインフレ現象とは明確に区別される)の相対的变化は、金平価とも購買力平価とも区別される異質な概念である。すなわち、後者が不変である場合にも前者は変化し、たとえ金平価にもとづく金本位制が存立していても、関係する国民経済間の資本蓄積条件、国際競争力を変化させ、新しい世界市場編成運動が契機づけられる。この点の理論的解明は、金に依存しないドル本位のシステムやいわゆるインフレ格差現象に変動相場制への移行契機を求めるメタリストの見解あるいは購買力平価説の限界を問うことになろう。

国際分業形成論として積極的に展開されてきたが、マルクスの場合、本来的に資本蓄積論と関連づけられていたと考えられる(第1章2をみよ)。

2 「金廃貨」の論理と過剰国際流動性

——ドル本位制と変動相場——

2.1 金節約のメカニズムとドル本位制

小西一雄氏は、IMF 体制下の金・ドル交換性問題にふれた興味深い論文で、赤字国が国際通貨国であるような場合に、非国際通貨国の一方的負担という形で各国が貨幣主権をなかば放棄するならば、国際的最終決済手段としての金の機能排除の可能性があるとしつつも、このような「金廃貨」のシステム、すなわち黒字国側の一方的負担となる信用供与を長期的に完結した制度として維持することは不可能であると指摘している⁶⁾。

ところが、ドル本位制としての「金廃貨」のシステムは、実質的には1962年の金プール制、68年の金二重価格制として固定相場制の枠組のなかで漸次形成され、71年8月に変動相場の世界で名実ともに確立した。

したがって、ここにはすくなくとも問題が二つある。一つは、第二次大戦後のIMF体制、すなわち資本主義世界体制のもとで国際通貨ドルの金兌換請求権放棄のシステムが形成されえた理由を追跡することである。いま一つは、その結果いかなる事態が発生し、ドル本位制としての「金廃貨」の国際的システムが変動相場と結びついたかを追跡することである。本項では、まず前者について私たちの分析視角を示しておこう。

ドル本位制としての「金廃貨」の国際的システムは、外国為替にもとづく世界貨幣金の重層的節約メカニズム、すなわち金節約の論理をベースにしているが、しかしその論理の埒を越えたものでもある。小西一雄氏が金・ドル交換性停止はシステムとして永続しえないといわれるとき、国際的信用に立脚した金節約のメカニズムと信用の限界が強調されており、諸国の管理通貨制を支える国際通貨協力体制というドル本位制の特殊歴史的、すなわち国家独占資本主義

6) 小西一雄、[361]。小西論文は金・ドル交換性問題について興味深い示唆を含んでいる。また氏が示唆する方向が60年代に存在したことも事実で、ヘイジマン、[272]がそれを分析している。一方、金プール制(62年)、金二重価格制が、ドルの金請求権放棄の一里塚であったことも忘れられてはならない。

表序-1 為替市場の創出と世界貨幣節約のメカニズム

市場創出母体	為替市場創出メカニズム	金節約の範囲・規模
I 顧客による為替市場の創出	個別外貨債権保有者による為替手形の振出しとその市場形成 個別決済当事者の振り出した為替手形の売買による振替相殺（この場合、為替業者は為替市場に貨幣信用を導入して振替相殺を円滑化する。つまり為替業者が手形を買い取って外国勘定にバランスを形成し、そのバランスにもとづいて送金手形を振り出して振替相殺するが、その操作は貨幣取扱業としての操作を越えたものである（第2章1をみよ）。ここでの為替業者の機能は、もちろん顧客による為替市場創出を与件とする）。	非金融的経済取引のうち振替相殺不可能分だけの金節約 個別決済当事者が社会的全体として保有する外貨債権と外貨債務の振替相殺分だけ世界貨幣金が節約される。未払差額は金決済される。つまり本来外国為替にもとづく決済が存在しなければ大量に堆積されねばならなかった世界貨幣を大幅に節約し、一国対外支払手段の必要量を減少する。
II 為替銀行による為替市場の創出	為替銀行の為替高・資金調整による為替市場の創出（拡大） 〔A〕 一国の当面の外貨請求権が外貨債務を越えるとき、銀行は国内貨幣市場から邦貨資金を借り入れて外貨請求権を買い取り市場を創出（拡大）する。買い取られた外貨請求権は外国貨幣市場で貸し付けられる（短期流動債権買取資金となる）。〔買い市場の創出による外貨受払い収支の調整〕 〔B〕 また、当面の外国為替受払い収支が債務超過のときは、外国貨幣市場で外貨を借り入れて（短期流動債権を取り崩して）外国為替を売り、市場を創出する。見返りに受け取った邦貨資金は国内貨幣市場に短期貸付される（以前の借入れ金の返済に当てられる）。〔売り市場の創出による外貨受払い収支の調整〕	Iの未決済部分のうち銀行信用にもとづく市場創出で相殺しうる分だけの金節約 〔A〕 本来Iの未決済差額（債権）は金で決済されねばならないが、銀行信用によって創出された市場規模だけ相手国の世界貨幣準備は節約される。つまり銀行信用の掛けつぎによって新たな金節約が実現される。 〔B〕 本来Iの未決済差額（債務）は金で決済されねばならないが、市場が創出された分だけ当該国の世界貨幣準備は節約される。
III 通貨当局による市場創出	中央銀行の為替市場介入操作による為替市場の創出（拡大） 〔A〕 当面の外国為替受払い収支が受取超過でしかもそれが民間為替銀行の市場創出能力を超えると、中央銀行は邦貨を市場に供給して外国為替を買い取る。この外国為替は当該国の対外支払準備として相手国に貸し付けられる。〔買い市場の創出による受払い収支の調整と貨幣市場の緩和の可能性〕 〔B〕 当面の外国為替の受払い収支が支	IIの未決済部分のうち中央銀行が市場を創出しうる分だけ金を節約 〔A〕 国家信用の掛けつなぎによる相手国の対外支払準備の節約と外貨（金為替）準備の形成。 〔B〕 国家信用の掛けつなぎによる当該